

---

# 千里を駆ける者

柳 リョウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

千里を駆ける者

### 【Nコード】

N8451X

### 【作者名】

柳 リヨウ

### 【あらすじ】

ただ一人、大切な千鶴いもつとを守るために、剣を振るう。雪村綱道の実の娘である雪村千里。妹だけの彼女の世界に、誠を抱いた男達の生き様はどう映るのか。基本原田×オリキャラの原作沿い二次小説。短編集になるか長編になるか怪しいところ。自己満足で書き連ねたものなので、いろいろと怪しいところがあるかもしれません。ところどころほかの新撰組漫画を参考にした捏造設定あり。残酷描写の警告は保険です。

「……はあ……千鶴の奴、どこ行っただら」

京の大通りの一角で、一人の若者がため息をついた。

後頭部で黒髪をきつちりとまとめ、薄藍の着物に紺の袴姿。腰には大小の刀を刺しているが、侍としてはやや華奢な印象を与えた。すっかり鍛えてあるはずのだが、腕も細いし胸板も薄い。

けれど、凜としたその瞳を見れば誰もが決してひ弱とは言わないだろう。その瞳には強い光が宿り、無意識でも油断なく辺りを見回している。

若者は、名を雪村千里ゆきむらみちると言った。現在18歳、妹の千鶴と共に父、雪村綱道ゆきむらひつなみちを探しに、江戸に上がってきたばかりだ。

けれども、数日前に千里は妹とはぐれてしまっていた。少し目を離れた隙に、姿を消してしまったのだ。

「まったく、童じゃないんだから迷子なんかになんないでほしいんだけどなあ……」

ぼやきつつも、内心は焦り切っていた。治安があまりよろしくないとも言われる京の町、しかも男装させてはいるが年頃の娘が一人。おまけに超が付くような無用心な子だ、心配しないわけがない。

彼女とはぐれてから、必死に聞き込みを続け、探してきた。が、いまだに消息はつかめない。逆にそれらしい少女が男たちに絡まれていたのを見たという心配になる情報だけ、一つ入ってきてしまった。

(……あそこに、頼ろうか……)

現在、頼れる場所はひとつしかない。父は行方知れずであるし顔見知りの松本先生も留守だ。

残っているのは、父が行った場所、である。

人斬り集団、『壬生狼』の屯所。

現在新選組と名を改めたそこは、千鶴には秘密だが最後に父がいたと思われる場所である。

なぜ秘密かというところ……彼ははそこで、危険な研究をしていたからだ。

出来れば関わることなく居たかったのだが、あそこは京の治安を守るといふ名目で京の見回りもしているし、協力を仰げれば情報が入りやすくなる。

もう一度、重いため息をついて千里は歩き出した。

「新選組幹部に取り次ぎ願いたいのですが」

屯所にいた門番にそう声をかけると、じろり、と視線を向けられた。

「取次ぎだと？何の用だ」

「人を探しています。ご協力願いたいのですが……」

「そんなこと知るか！さっさと帰れ、小僧」

ちっ、と千里は舌打ちをする。

ただの人探しごときに、新選組が協力してくれるとは思っていない。が、雪村綱道の娘であれば動くかもしれない。そう考えてここに来たのだが、幹部以上の人間でなければ綱道の名は多分出せない。最初からはじかれたら終わりだ。

千里は少し考えた後、おとなしく引き下がる振りをして近くの物陰に身を潜めた。

巡察には、組長が必ずいるはずだ。巡察帰りを狙えば、会うことが出来るかもしれない。

「……つたく、疲れるな……」

壁に寄りかかりずると座り込む。千鶴とはぐれてから、ろくな睡眠が取れていない。目の前が暗くなるうとするのを、気力で振り

払った。

眠気と格闘しつつ、五感を研ぎ澄ませること数刻、彼らは帰ってきた。

すっと物陰から覗くと、どうやら二隊いるらしく、予想よりも多い人数の姿が目に入った。

(幹部は……)

ゆっくりと端から見回し、それらしい人物たちを見つけた。

一人は額に鉢巻を巻き、かなり体を鍛えているのがよく分かる人物。もう一人はその隣、長い槍を持ち、腹にさらしを巻いている人物。

どちらも他の隊員とは違う雰囲気をもっている。

(……行く、か……?)

わずかに迷った、その瞬間、目の前に何かが突きつけられた。

「……っ!？」

「おいおまえ、さつきからそこで何してる？」

いつの間にか、槍が突きつけられていた。

槍を持った男が、すっと目を細め、もう一度口を開く。

「もう一度聞け。何してるんだ、こんなところで」

背筋を冷や汗が伝う。殺気に押されて、声を出すことが出来なかった。

(……何か、言わなければ……)

敵意はないのだと示さなければ、斬られる。

「新選組の……組長……です、か……?」

「ならどうすんだ?」

さらに言葉が鋭くなる。悪化したと感じ、千里は必死に言葉をつむいだ。

「人探しに、協力してほしい……綱道氏を知っているでしょう、彼の娘を探しているんです」

その瞬間、男が顔色を変えた。

「……おまえ、千鶴のことをどうして……」

わずかに視線を泳がせた後、男は低い声で「来い」と言った。

「新八、先に隊の奴ら連れて帰ってくれ」

「分かった」

他の人間がいなくなると、男は千里に立つように促す。

「抵抗はするなよ。一応、手を出せ」

頷いて言われたとおり手を出すと、縄で手首を縛られる。

(……………これ、やばいかもしれないな……………)

冷や汗をかきつつ千里はそう考えた。

この様子だと、千鶴はすでに新選組となんらかの関係がある。しかも穏和に済まない関係が。

男が歩き出したので、千里もその後ろを追って歩き出した。

## 巻（後書き）

自己満足小説始めましたw

最初の辺りは面白くもなんともないと思いますから、第四話まで丸々飛ばしていただいてもかまいません。多分分かります。きっと分かります。

なんとなく妄想を書き留めていくので、のんびりお付き合いいただけると思います。

「とりあえず、おまえは何者だ？」

屯所の中の一室につれてこられ、そう聞かれた。

「俺は、雪村千里。千鶴は俺の妹です。京には共に来ましたが、途中ではぐれてしまい、探しています」

「なるほどな。よくありがちな話だが一応千鶴の話とは矛盾してねえ。が……」

わずかに考えるように、男が視線をそらす。

「兄がいるとは初耳なんだが……」

「兄じゃなくて……姉です、姉」

ぼそり、と千里が訂正すると、男は一瞬ほかんとした顔をする。

「……………女？」

「見えませんか、女に」

むっとする千里は、確かに男としては華奢ではあるが。

千鶴のように、一目で分かるほど、女らしくはない……。鍛えられた動きとか、一人称が俺なとか、まったくくない胸とか……

「……………失礼」

ポン、と男が軽く千里の胸に手を当てる。

「っ……!!」

「……………なるほど、女だな」

「っな、なななにするんですか!!」

手を縛られていて阻むことが出来ず、千里の顔が真っ赤に染まる。

「先に謝っただろーが」

「そ、そういう問題じゃない!!」

ぎつとにらんだ千里に男は苦笑したが、すぐに真顔になった。

「千鶴は今、ここにいる。だが、現在は要注意人物として扱われているんでな、一度接触すればおまえも同じ扱いになる。いいか？」

「……………はい。千鶴の安全は確保されてるんですね？」

「命の保障はする。そこまで不便な生活もさせねえつもりだ」  
千里は少しほっとした。

「会わせてください。お願いします」

千鶴の無事を、確かめたい。

「ああ、わかった」

男は、千里に向かってにっと笑った。

それからしばらくして、千里は幹部のそろった、別の部屋に移された。

そこにはまだ、千鶴の姿はない。

「……千鶴は、どこですか？」

「あいつに会わせる前に確かめることが山ほどあるんでな。座れ」  
奥にいた長い黒髪の男が、厳しい声で言った。位置と印象からすると、きっと彼が新選組の鬼副長、土方歳三であろう。

その隣は、たぶん局長近藤勇。さらにその隣の眼鏡をかけた人物が総長山南敬助だろう。

新選組隊士ではなくとも、この三人ぐらいの名は知っている。さすがに他の人物の名は分からないが……

「まず、何でお前は物陰に隠れ、様子を窺っていたんだ」

土方が、低い声で問いかける。正直、そのあたりは深く突いてほしくないのだが。

「……正面からお願ひしても聞き入れてもらえる話ではないと思ひましたので、話の通じるお方を探しておりました」

「ただの人探しなら誰でも同じことはわかってんだらう」

「……綱道氏の娘なら、話は違つかと思ひまして」  
すっと土方の瞳が細まる。

「……お前、どこまで知ってたんだ」

「父上がここにいたと言う話は聞いております。何かの研究をして

いた、と……極秘の研究であるから、あまり人に申すなと言われま  
した。新撰組の間でも、幹部以外は自分のことを知らないのだと」  
「その薬がどんなものであるか、知ってるか？」

「はい」

「なんだ、秘密がばればれじゃないですか。綱道さんも案外信用で  
きないなあ」

そうばやいたのは茶髪の男だ。

「俺が知っているのは江戸のほうでわずかながら研究の手助けをし  
ていたからです。俺以外は誰も知りません」

「ふうん？ 確証はあるの？」

「知りません。一番近くにいた千鶴でさえ知らぬことが証拠です」  
家族であり、一つ屋根の下に住む妹にさえそれを知られぬよう、千  
里は必死に覆い隠してきた。羅刹は、恐ろしいものだから。

「たしかにね。千鶴ちゃん、最初に羅刹見たときこの世のものとは思  
えないって顔で凝視してたからねえ。知ってたとは思えないな。

ね、土方さん」

「ああ、そうだな……」

「っ千鶴が羅刹と遭遇したのですか！？」

千里は思わず身を乗り出した。

「ぶ、無事なんですよね！？」

「大丈夫だ、落ち着いてくれ」

優しい声で、近藤が言った。

「彼女は無事だ。トシ、そろそろつれてきていいだろう？」

「……ああ。平助、連れてきてくれ」

平助と呼ばれた青年は「りょーかい！」と元気よく言うと、長い髪  
を翻し姿を消した。

しばらく待つと足音が戻ってきて、数日振りの妹が姿を現した。

「千里！良かった、無事だったんだね！？」

千鶴は千里の姿を見るとくしゃつと顔をゆがめて抱きついた。

「それはこっちの台詞だよ。良かった……」

千里はゆっくり頭を撫でてやる。

「相変わらず泣き虫だなあ、千鶴は」

「だ、だつてえ……心配したんだよ……？」

「千鶴に心配されるほど俺は抜けてない。だいたい迷子になったの千鶴だろ？俺が心配する立場だと思うなー」

「そ、そうだけど心配したの！」

そういうやり取りを繰り返した後、我に返った千里はまわりから向けられる暖かい視線に気付き、顔を赤らめて正座した。

「でさあ、この子どーすんの？」

そついったのは平助だ。

「千鶴とおんなじように誰かの小姓にすんの？」

「……そうだな、それが妥当だろうな」

ふと、さつき千里をつれてきた長槍の男が口を挟んだ。

「千里、おまえ剣術の心得か何かあるのか？」

千里は驚いたように振り返る。

「所作がな、案外隙がない。剣術の心得があるんなら、隊員にするつてのも手だと思っぜ、土方さん」

土方は眉間にしわを寄せた。

「……腕次第、だな。誰かと手合わせしてみろ」

「え、はい、分かりました……つて、今やるんですか？」

「今だ。おい総司、手合わせしてみろ」

ぱいっと放り投げられた木刀を掴み、千里は「はあ」と抜けた返事をした。

「それじゃ、僕が沖田総司。よろしくね、千里ちゃん」

茶髪の男がにやりと笑うと木刀を握った。

「よろしくお願ひします」

軽く頭を下げ、二人は庭に出る。すでに日が暮れかけた庭は薄暗かったが、どちらもあり気にしなかった。

先に動いたのは、沖田だった。

タンツと地を蹴る音と共に鋭い突きが繰り出される。千里はその突きを紙一重で交わすと木刀を斜めに振り上げた。

カカカンツと木刀の打ち合う音が響く。やや千里のほうを押されているが、対等に近い戦いだっただった。

「なかなかやるじゃねえか」

土方が感心したようにつぶやく。

「やあっ!!」

左上から斜めに振り下ろした木刀を、沖田が後ろに飛んでよける。

やや大振りに振り下ろした千里に、わずかな隙が出来た。

「隙ありっ」

頭を叩き割るつもりかと思いたくなるほどの思い切り振りかぶった斬撃をよけようとして、千里は体制を崩した。

「っうわ!!」

思い切り尻餅をつく。そして、喉下にぴたり、と突きつけられた木刀を見て、「参った」と悔しげに言った。

「尻餅つくなんてまだまだだね」

「うー……」

悔しい、そう思いつつ、彼女は立ち上がった。新撰組の幹部にただの女がかなうとは思ってはいないが、悔しいものは悔しいのだ。

「そう悔しがらんじゃねえよ。総司相手にこれだけやればすげえほうなんだから」

そう励ましてくれたのは、千里をつれてきた長槍の男だ。

「土方さん、こいつ、俺の組で引き取っていいか？」

「ん?……ああ、任せたぞ原田」

「そいじゃ、もらってきます」

千里の方へやってくる原田と、土方がすれ違う。

『監視を怠るなよ』

ぼそり、と原田にだけ聞こえる声で、土方が言った。

原田は軽く頷き、また不敵な笑みを浮かべ、千里の下へと歩いていった。

「俺は原田佐之介、十番組組長だ。よろしくな」

「よろしくお願ひします、……原田組長」

なんと呼ぼうか少し迷った末、千里は役職名で呼ぶことにした。

「おう。んじゃ、屯所内を案内してやるよ。行くぜ」

そういつて歩き出した彼に、千里は他の幹部に礼をし、「それじゃ」と千鶴に声をかけると彼の背中を追って歩き出した。

#### 四

新選組は、幹部以下の人間はすべて共同生活である。

この大人数で個室などあるわけも無く、基本組ごとに大部屋。巡察なども隊ごとで動くので、個人でいられる時間はあまりない。

つまり、女の身であることが果てしなくばれやすい状況なのだが……

(……なんでここまで順応してんだ、俺)

防具を身につけ竹刀を振りながら、ふと千里はそう思った。

入隊して早数週間。最初のうちは突然の新入隊員に好奇の目を向けられていたが、数日経つと見事に溶け込んでいた。

多分、ごく普通の新入隊員として特に特別扱いされていないところがあまり気にされなかった要因ではないかと思われる。

逆に、千鶴は現在かなり浮いた存在であるらしい。現在土方副長の小姓の役職を与えられている彼女だが、そもそもいきなり現れて副長付き小姓になって個室までもらって……なんていうのはかなり破格の対応であり、浮くのも当然なのである。実際は監禁されているだけなのだが。

「おい、千里！何そんなところでぼやぼやしてんだ？」

「あ、藤堂組長」

道場は人が多いので、少し裏手で竹刀を振っていると、八番組組長、藤堂平助がやってきた。

藤堂は、千里の呼び名に不満そうに眉を寄せた。

「藤堂組長って呼び名、やめようぜ？平助でいいよ」

「俺はただの平隊士ですし、そんな呼び方は出来ませんよ」

「いーからさ。年も近いんだし。というか、組長なんて呼んでんのか、お前ぐらいだぜ？」

「……藤堂さん？」

「平助！。俺だけ呼び捨てってなんか気が引けるじゃん。後敬語も無しで」

組長と平隊士では階級が違うのだから……と言おうかと思ったが、「かんけーねーよ」と切り捨てられるだろうと思ったのでやめた。

「……分かった。よろしく、平助」  
そういうと、平助はにかつと笑った。

「おう！よろしくな！ということで千里、稽古の相手してくれよ」  
「べつにいいけど、俺なんかでいいのか？他にも相手がいるだろ」  
「総司と遣り合ってたの見て一度稽古してみたかったんだー！さ、やろーぜ！」

とても楽しそうな平助に千里は苦笑した。

「お手柔らかに頼むよ？」

「やだなー、強いくせにそんなこと言うなよ！本気で一回戦にきまつてっただろ？」

「疲れるんだよ、平助ぐらい強い相手とやると」

そっぴいなながら面をつけ、竹刀を構えた。

「行くぞっ！！」

「おう！」

遠くから聞こえてくる竹刀のぶつかり合う音を聞きながら、「精がでるなあ……」と原田はつぶやいた。

「何だよ左之。さっさと行くぜ」

玄関で下駄を履いていた二番組組長、永倉新八が原田に声をかける。

「ん？ああ……あ、そっぴいや平助誘ってねえけどいいのか？」

「あー、忘れてたな。……まあ、いいんじゃない？見つかる前にこっちも行かなきゃならねえし」

「まーな」

そっぴいつて歩き出そうとしたとき、二人の前に黒い塊が転がり込んできた。

「っ……千里！それ反則だろっ！！」

「だって俺特に型とかにとらわれない稽古してたから反則とか知らないしー」

「んじゃもうなんでもありな!!はっ!!」

「うわっ!!」

面をつけた二人の隊士（声からすると多分平助と千里なのだろう）は地面を転がってただの喧嘩に近い試合を行っている。

「……おいおい、それすでに稽古じゃねえだろ」

原田が突っ込むと、千里と目が合った。

「っあー!!組長なにサボってるんですか!!」

「おい千里っ!!馬鹿、静かにしろって!!ほかの隊士にばれたらどーすんだ!!」

原田は表情を変えなかったが、永倉はあせったように千里に言った。「何だよ新八っつあん、もしかして島原か?何で誘ってくんねーんだよ!!抜け駆けなんてひでーぞ!」

そういつた平助に、千里はちよつと男の現実を感じていた。

「……島原って……花町……」

花町、舞妓さんや花魁がいるところ。つまりは男の人が妓を買って

(以下略)

「へえ……昼間っから行くんですかあ……しかも隊務サボって……へえ……」

じとー……とした目でみると、永倉と平助があせりだした。表情をまったく変えない原田はなにを考えているのか。

「っそ、そんな目で見んじゃねえよ!!あ、あのなあ、お前にはわかんねえかもしんねえけどなあ……」

「俺も連れて行ってください」

永倉の目が点になった。

「おま……お、女だろ……?」

「酒ですよ酒。おごってくれたらちやらです」

三人は顔を見合わせた。

「いいんじゃないの?連れて行っても」

そうだったのは原田だった。

「お前は酒目当てだからいいのかもしれないけどよ……」

「別に女買つてもいいんですよ。俺は一応現実知ってますし。勝手に酒飲んでるんで」

「……お前それが素の性格か……」

「そうですよ？千鶴と似てないでしょう？」

「ここに笑う千里に永倉は頭を抱えた。

「ったく、しょうがねーな、んじゃ、さっさと行きますか」

「おう！」

とりあえず防具類を置いて来る暇はなさそうなのでそこら辺の茂みに放り込み、彼らを追いかけた。

## 五

「はぁー……おいしいなあ……」

千里は、目の前に置かれた二人前の料理をパクパクと口に放り込みながらほう、とため息をついた。

「……お前、さっきから料理しか食ってねえじゃねえか。酒飲みてえんじゃなかったのか？」

島原のとある宿に入っすぐ平助と永倉は綺麗な女の人達と消えてしまい、とある部屋で原田と千里は料理を堪能していた。

「だって酒飲んだら味分かんなくなっちゃうでしょ。先に料理のほうを味わっとかないと」

そう言っ千里は楽しそうに料理を口に運ぶ。その姿を見る原田の瞳は、何の感情も移していなかった。

「………原田組長、そろそろ監視するのやめて、くつろいだらどうですか？」

静かな千里の声に、原田は固まった。

「俺を泳がせても何も出てきませんよ。父を見つけないのなら、別の手を捜すべきだ」

「……いつから」

気付いていたのか、と言う言葉は千里が口を開いたのでかき消された。

「最初から、監視されるだろうと思っていたので。だって、千鶴があれだけ嚴重なものにもかかわらず、俺の方はかなり自由にしてくれてましたからね」

そこから、きつと自分を泳がせているのだと思った。千鶴が新選組の下にいる限り、千里は逃亡することは出来ない。縄をつけて泳がして、大元を見つけようという魂胆だろうと。

「俺が誰とつながっているか考えていたんでしょう？長州の方が、父か。どちらもはずれですけどね」



ながら酒を煽る。

「もう知るかあああああつ！！！！あ、お姉さん酒、酒持って来て！！！」

ちよつと廊下を通りかかった女性に、千里はそう言つてまた酒を煽る。

「ぐ、ふつ、ははははっ！！！」

「原田組長変な笑い声出さないでください！！！気持ち悪っ！！！」

「いや、無理っ！！！お前、千鶴に抜けてるっつってたけどな、お前も十分……ククッ」

「知つてます！！昔から父に言われ続けて早十数年……これでもかなり気をつけてるんです！！！」

頬を膨らませて酒を口に含んだ千里の頭を、原田はよしよしとなでた。

（これが計算だつたらかなり恐ろしい女だが、天然だつたらかわいいいな）

「何考えてるんですか！？馬鹿だとか思つてるんでしょうそうでしょう！！！どうせ俺は馬鹿ですよー！！！」

「お前すでに酔つてるな」

「酔つてませんよ。俺は断じて酔つてなんていません。俺はざるなんです」

そうこぶしを握り締めて主張する千里の頬はすでに赤く染まり、声にも張りが無い。いつもは冷たく鋭い瞳も蕩けている。

「あー、悪かつたよ。笑ひすぎた。謝るからそろそろやけ飲みはやめ……つて何直飲みしてんだ！！！」

「俺はっ！酔つてません！！！」

ばん、と畳に手を付いて立ち上がったものの、一拍置いて見事に転げる。

「あだっ」

「だから言つてんじゃねえか。もう寝ちまえ、屯所までちゃんと連れ帰つてやる」

「うー……」

とろとろと落ち始めた臉を懸命に押し上げながら、千里がつぶやく。

「千、鶴に……」

「どうした？」

かわいい、そう思いながら優しくその黒髪をなで、その言葉の続きを待つ。

「……手を出したらぶっ殺します……」

「……」

その後門限近くになって戻ってきた永倉と平助は、「やっぱり可愛くねえ……」「とぶつぶつ言いながら千里を運ぶ原田の姿を見たのだった。

## 五（後書き）

ええと、つまり、

千里は計算とかけっこうするわりにものすごい抜けている天然っ子  
ってことです！！

不自然ですね、はい知ってますけどごんほら自己満足小説ってこと  
で許して！！

## 六

忘れるな、お前の主君を……

幼い頃から、繰り返されてきた言葉。

お前は命に代えてでも、守らなければならない

浮かぶのは、涙に濡れた黒真珠のような瞳。

命に代えてでも千鶴を守り、生かせ……

だから私は、剣をとったのだ。

彼女の、ために……

ふっ、と目が覚めた。

何があったわけでもない、ただなんとなく意識が覚醒してしまったようだ。

誰にも聞こえないように小さくため息をついて寝返りを打ち、ぎよつとする。

(……………やっぱり慣れないな)

すぐ隣には、原田の寝顔があった。

何度も言うが、幹部以下の隊員は基本大部屋で布団を並べて寝る。現在隊員の増加により個室が足りず、組長も隊員と共に大部屋で寝ている。そして千里は原田の監視対象であるため、必然的に布団も近くなる。

その分暗殺などの危険性もあがるのでは？と冗談で言ってみたら、

「お前に殺されるなら悪くねえかもな」と言われた。これは、どう反応せよと？

ほぼ毎日この位置で寝ているわけだが、いまだ慣れず、寝顔を見るたびにぎよっとする。

(ああ……寝れる気がしないな)

軽く布団の中で体を伸ばすと、千里は忍び足で部屋を抜け出した。いまだ春になりきらぬこの時期、襦袢のみではいささか寒い。羽織を持ってくるべきだったと後悔したものの、そんな考えもすぐに掻き消えた。

(う、わあ……………)

澄んだ夜空に広がる、満天の星空。きらきらと輝く星屑をかき消すようにひととき強く輝く満月に、千里はひきつけられた。

じーっと夜空を見上げていた千里は、いつの間にかすぐ傍にやってきていた人影に気づき、視線を落とす。

「……山南総長？」

山南は、眼鏡の奥の瞳を細めて笑った。

「千里さん、夜遅くにどうしたのですか？」

「あ、いえ、目が冴えてしまったもので、月を見に……」  
そうですか、とまた山南が笑う。

「確かに、今日はとても月が綺麗ですからね。夜だと言うのにこんなにも明るい」

目が、笑っていない。

言外に「こんな夜に何か企んでないませんかよね？」と言っている。

「……いやー、やっぱり月っていいなあ。千鶴にも見せてあげたくありません。知っていますか？千鶴、月が好きなんですよ。もし今度機会があったら夜月を見せに連れ出してあげてください」

「おや、いいのですか、そのようなことを頼んで。これでも私も一人の男なのですが」

「絶対に手を出さないでください。月だけです月だけ。見せるだけ」  
必死にそう言った千里に、山南は苦笑する。

「君も、ですよ。こんな夜中に一人でうろつくものではありません。君は女性なのですから」

その言葉に、千里も苦笑を返した。

「やめてください、なんかむずがゆいです。女性扱いなんてしなくても、俺は男で通してるんですから」

「さて、そう思っている人は何人いるのでしょうかね」

意味深な微笑に、千里は首をかしげた。

「それよりも、そんな薄着では寒いでしょう」

「え？あ、そういえば」

今更ながら、体が冷え切っていることに気付く。思わず両腕で自分を抱え込んでしまった千里の肩に、ふわりと羽織がかけられた。

「これを着ていなさい。あまり体を冷やすと、体調を崩してしまいますよ」

「でもこれ、山南総長の……お返しいたします。山南総長が冷えてしまいますよ？」

あわてて脱ごうとする千里の肩をやりわりと羽織の上から押さえ、彼が笑う。

「遠慮などしなくてもいいのですよ。まだしばらくここにいますか？」

「いえ、もう帰ろうと思っていたところです。ですから、これは山南総長がお使いください」

「そこまで固辞されると、少し傷つきますね」

その言葉に、千里はあわてた。

「いえ！別に嫌とかそう言うわけじゃ……！た、ただ、……総長、少し顔色がよくないように見受けられます」

月明かりのせいだけではない、青白い顔。

「山南総長こそ、お体を大切になさってください。俺はもう戻りますから」

そう言つて、千里は山南の肩に、羽織をかける。

「それじゃあ、おやすみなさい」

「…………ええ、おやすみなさい」

山南の視線を背中に感じながら、千里は部屋へと戻った。暖かかった布団もすでに冷え切り、眠るには少々寒い。

とりあえず布団の中で丸まったところで、にゅっと暖かい手が伸びてきた。

(……………ッ!?)

(千里か、どこ行ってたんだ?)

ぎゅっと引き寄せられて、布団の境目近くまで体が移動する。すぐ傍に、原田の顔があった。

(っ、月を見てきただけですが(何で引き寄せんの!? 離せええええええ!!))

(……………冷えきってんな、こっち来い)

原田の布団の中に引っ張り込まれ、その腕の中にすっぽりと収まる。

……………しばし沈黙。

(な、な、な、何考えてるんだあんた!!!! 離せ、離して下さい  
組長!!!!!!)

(んー……………もー寝ろって……………)

(寝ぼけてるんですか!? くそ、離せええええええええええ!! ほかの人に見つかったら超誤解されますよ? そっちの気確定ですよ!?)

……………って聞いてねええええええ!!)

結局、千里はまったく寝付くことができなかった。

## 六（後書き）

このあたりの話は風光るといふ新撰組漫画からの妄想w

沖田さんがヒラ隊員の主人公と布団並べて寝てるシーンがありました、んじゃ千里ちゃんでもいけますか？ってなった。あとなにげ山南さん出演。実は大好きです山南さん。

ちよつとずついろいろなキャラクターと混ぜながら、随想録エピソードとかも制覇してみたいですね^q^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8451x/>

---

千里を駆ける者

2011年12月4日23時52分発行